

令和6年度俳句ポスト第二回入選句



子どもの部 36句

一般の部 4句



俳句ポスト第二回入選句

一隅に秋刀魚眩しく売られをり

須賀川市

伊藤和代

木犀の大樹に添へば旅のひと

福島市

木村隆茂

虫時雨すーつと通る針の糸

須賀川市

関根邦洋

神炊館の句碑の数々蟬の羽化

須賀川市

渡辺圭子

ふらなくてゆめのなかだけゆきがっせん

須一小1年

佐藤稜久

さむいひもともだちいればさむくない

須一小1年

芳賀充祥

あがるたこわたしをのせて青空へ

須三小1年

石川楓

こうていのゆきのベットにねころんだ

須三小1年

常松陽翔

ぼくのとこかつていとをひっぱるよ

須三小1年

柳沼叶夢

山のぼり手ぶくろくろくそまったよ

阿武隈小1年

園田惺己

こおろぎのうしろをぴょんぴょおいける

白方小1年

矢部匠真

第27号

令和7年3月号

投句状況

〈第二回〉

■投句者 1,601人

■投句数 3,288句

ジャンプしてふかふかのゆきぼくのかたち

須一小2年

大寺陸翔

雪の中まけずにそだつぼたんのめ

須三小2年

鈴木りんか

なつがきて大きいかげがこうていに

柏城小2年

遠藤羽那

あさの日がひかりかがやく六月だ

柏城小2年

近藤伊生貴

楽しいなこおった水をわつてるよ

須一小3年

石口陸

ザクザクと足音鳴らすしも柱

須一小3年

川村旭大

しゃかどうをいろいろどるゆきのさんぽみち

須一小3年

小高由結

雪ふった地きゆうの白いかみの毛だ

須一小3年

八木沼新太

れんこんが電車みたいにならんでる

阿武隈小3年

小山田智花

秋の鳥バレエのように木の上へ

柏城小3年

遠藤陸

北風がふくと木たちが歌いだす

白江小3年

小針果歩

氷柱はね光るきれいな太陽だ

須一小4年

若狭一陽

雪だるまとけないまほうをかけたいな

阿武隈小4年

岡部紬生

冬がきたぼくの鼻先トナカイだ

阿武隈小4年

佐藤嵐土

ふわふわのほうきに見えるすすきのほ

柏城小4年

熊田翔太

カマキリのはねいつひらくいまひらく

柏城小4年

若松柊翔

初めてのセリなべ大人の味がした

白江小4年

鈴木創志郎

緑の葉まっすぐ一列ねぎ畑

稲田学園5年

小坂柔心

夏の花ざぶざぶくらよんでる

柏城小5年

秋山悠翔

うつくしい刀のような生さんま

長沼東小5年

森藤紗穂

さつまいも根つこのあとがならんでる

長沼東小5年

吉田彩乃

源吾ねぎけんかにまけてまげられた

白江小5年

石井絵奈

白い雲近く感じる冬の山

白江小5年

能登敦之志

六時半起きて二度寝冬至かな

須三小6年

橋本結絆

少しだけ友達気分雪だるま

阿武隈小6年

本間翼

白鳥の大きなつばさすきとおる

阿武隈小6年

柳沼心春

あげはちようとなりを歩く帰り道

柏城小6年

小林彩葉

算数にイチヨウの形出てきそう

柏城小6年

菅谷勇太

ブランコが見えないだれかと遊んでる

柏城小6年

橋本芽愛

ふるまい

座礼

おじぎをするときに大切なのは、頭をさげるときよりあげるときです。静かに下げた後、ゆっくりとした気持ちでゆっくりと元に戻します。



手の所作

道具はいかに軽いものでも、重いものと同様に扱います。無造作に置いたり、取ったりするのではなく、手離れはゆっくり、細やかな心配りを心がけます。



ふすま

特に注意することは、唐紙の部分に指をかけないことです。必ず縁と引手を持って開け閉めをします。



講師は須賀川茶道連合会裏千家の佐久間宗初先生と西間木宗紀先生。

アドバンス クラス

茶道では季節感を大切に表現します。本講座では、お茶の歴史や道具、茶花、掛軸の話。帛紗さばきや心得などを学びました。

教えていただいたお茶の心

- ①「お茶は心をこめて、おいしく点てましょう」
- ②「同じ空間にいる人同士お互い尊重し合い、楽しいひと時を過ごしましょう」
- ③「どんな時も落ち着いてやさしい心を持ちましょう」
- ④「お菓子やお茶をいただく時は、次の方に「お先です」と、相手を思いやる心を大切にしましょう」



すかがわ大人塾

愉しく、美味しく、季節の茶道教室



第三回

こども和文藝塾

さくら
もちら
春待ち和菓子教室

2/22(土)



講師は近江屋菓子司の安藤先生です。



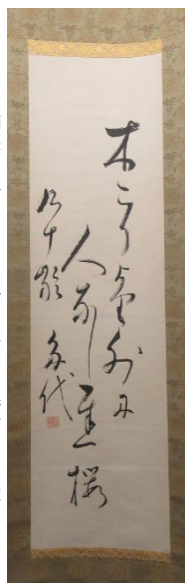
まぜて
焼いて
くるんで
桜の葉を巻いて
出来上がり

桜もちと
須賀川茶道連合会の
皆さんにたてて
いただいたお抹茶を
いただきました。



焼いた皮で餡を
巻いた関東風の桜もち

展示品の紹介



軸装 木こりより外に人なし遅桜 多代女 (当館蔵)

いちばらたよじよ
市原多代女 一七七六一八六五

江戸後期の俳人。若くして夫と死別、家事と子育ての心労を癒すために俳諧を学ぶ。そのあと多くの俳友と交わり余生を楽しんだ。芭蕉を尊敬し、句碑を建立するなど須賀川の俳句の発展に一生を捧げました。

終に行道は何処ぞ花の雲

水かさに車はげしや藤の花

目かくしをとれば雛の笑顔かな



言の葉

猫の恋

「猫の恋」は春の季語。雄猫の千変万化な切ない声が聞こえてくる季節です。

鼻先に飯粒つけて猫の恋 一茶
恋猫の血舐めてすぐ鳴きにいく 秋邨



秋邨

息を吹き入れて膨らませてポンポンと手で打ちあげる紙風船。
紙でまり、空気玉ともいう。明治ごろから流行りだし、のちには鈴入りのものも作られました。

紙風船紙の音してふくらみぬ

清美



紙風船

お知らせ ◆ 俳句ポスト ◆

募集期間 通年
募集方法 投句用紙
または葉書

選句会 年2回

部門

一般の部
子どもの部
学校の部



入選者全員に配布
される投句選集です。

オープンギャラリー
には入選者の作品が
展示されています。



文化振興課
公式 Instagram



風流のはじめ館
HP